

平成 22 年度「地域実習」  
NGOネットワーク山口スタディーツアー報告書

「シャンティ学生寮訪問・モンの村ホームステイ・  
子ども達とのふれあい・エコツアー」

平成 22 年 8 月 30 日（月）～ 9 月 7 日（火）



参加学生：（国際文化学科 2 年）板垣成美、佐藤汐莉、平岡美佳子  
（国際文化学科 4 年）福元徹

引率教員：岩野雅子

「今回のスタディーツアーで一番変わったのが先生ですね」。スタディーツアーでお世話になった佐伯さん、安藤さんからいただいたお褒めの言葉だ。この言葉に、「はい、そうです。」と素直にお礼を言いたい。タイ北部のホイプム村での滞在は、これまでのスタディーツアーとは異なるカルチャーショックがあった。水道も電気もない村で生きる人々と数日をともにするなかで、「すべての人間の数だけ世界の中心がある」という言葉が現実のものとして感じられるようになった。

とはいえ、ホイプム村に入る山道では、トラックに揺られながら「ここまで来たこと」を後悔した。車がスリップして、学生もろとも谷底に落ちたらと冷や汗をぬぐった。ラオス国境の山登りの道では、切り立った崖の先から学生を見失ってしまうのではないかと冷や冷やした。わずか一歳の時に父親の背中におわれてラオス側から川を渡って逃げてきたという通訳兼プロジェクトマネジャーのジッポンさんの体験談、ホイプム村でソーラーシステムの開通式を盛大に祝った夜に、ラオスから山を越えてきた人々にシステム一式を盗まれてしまったという話…。人間はどんなところでも生きていけるのだという思いと同時に、人の力ではどうしようもないことが数多くあるということが実感できる現場だった。

特に印象的だったのは、ホームステイ最終日の振り返りのセッションであった。「私たちは毎日毎日働くことだけで、楽しいことがあまりないけれど、今回学生さんたちが来てくれて、餅つきとか狩りとか、みんなで楽しいことを一緒にできたのが本当に良かった。」一年に一度の楽しみ（お正月）以外にはこれとって娯楽のない村人の生活と、私たちの生活との落差の大きさを目の当たりにさせられる言葉だった。「日本にはいろいろな物が何でもそろっているし、学生のみなさんは日本に帰ったら何でもできるのだから、がんばって勉強して、良い仕事についてください。」村人のほうが私たち日本人の立ち位置を十分理解しており、心配してくれていた。

ホイプム村の中には川が三本流れていた。裸足で川を渡り、隣の家に行った。川で洗い物をする人の姿も見かけた。毎日夕方にはスコールが降り、穏やかな川の流れは濁流と変わった。足を取られると、一気に流されて命はない。ゴウゴウと音を立てて流れる水の前にし、すぐそこの家に帰れない。日が沈むとロウソクの灯りが頼りだった。朝はニワトリの声で気持ちよく目覚めた。

ホイプム村を囲む山も、タイ北部の山々も一面、バイオ燃料にするトウモロコシ畑だった。転げ落ちそうな急斜面で連日農作業に追われる山の民がいた。その山は、タイ、ミャンマー、ラオスにつながっている。山のあちこちに、同じような村がいくつもある。シャンティ山口では日本政府の助成金を得て、向こう三年間をかけてホイプム村50軒の家のすべてにエコトイレをつけ、命の森（アグリフォーレスト）をつくる計画を進めている。事業の成功の陰には、シャンティ山口の日本人と現地職員、ホイプム村の村長・長老・村人たちの、「子どもたちの未来への願い」があった。グローバル化の波にのまれる現在の生活から、いかに未来を切り拓くか。どの地域にも当てはまる課題があった。

## 2. 日程

8月30日(月) 福岡空港国際線集合

TG649 11:45 発、バンコク経由、18:25 チェンマイ着。

ホテルチェックイン後、チェンマイのナイトマーケット等散策。

8月31日(火) チェンマイ発、慶応大学生3名と合流後、セーンサイ村へ。

保育園を訪問し交流会。チェンカムのシャンティ山口事務所着。

9月1日(水) ラオス国境のプーサン・プチファー見学。

9月2日(木) トラック2台でホイプム村へ入る。ホームステイ開始。

9月3日(金) ホストファミリーのプログラム。交流会。

9月4日(土) ホストファミリーのプログラム。

9月5日(日) ホストファミリーとの振り返りの会。シャンティ学生寮へ。交流会。

9月6日(月) チェンラーイ(ドイツン寺院、ゴールデントライアングル見学)、空港へ。  
チェンライ発バンコク行き搭乗。

9月7日(火) TG648 バンコク発、8:00 福岡空港着。解散。

## 3. タイ訪問の目的

- ・山口県で活動をする NGO 団体について知ること。
- ・事前学習会(7月24日、25日)に参加し、援助することについて考えること。
- ・「援助する側・される側」について、事前学習会で学んだことを実際に現地で体験しながら考えを深めること。
- ・学んだことについて、事後学習会(9月25日)で報告し、NGO 関係者と意見交換をすること。
- ・山口県で活動をする NGO 団体について理解を深めるとともに、行動する側に回るという視点に立脚できるようになること。

## 4. スタディーツアー参加者

シャンティ山口事務局長：佐伯昭夫、山口県立大学教員：岩野雅子、山口県立大学大学院2年生：安藤公門、山口県立大学学部生：板垣成美・佐藤汐莉・平岡美佳子・福元徹・坪谷純希、山口大学学部生：久保貴大、読売新聞社記者：小笠原瞳、慶応大学学部生：間中倫平・近藤陽香・佐々木綜太郎

NPO 法人シャンティ山口は、長きにわたってタイ北部の少数民族、モン族の支援に当たってきた。「モン族の文化」と聞いて思い浮かべるものは刺繍であろう。刺繍をはじめとする手芸は女性が担っており、民族の誇る代表的文化といっても過言ではない。ここでは、まず文化的側面について報告する。

モン族を代表する文化である「刺繍」については、交流会で様々な形の衣装をみる事ができた。土産用として目にする民族衣装の刺繍は、手頃な価格となっているが、それは利益を得るために簡単なデザインで製作されたものである。本当のモン族の刺繍は高価で、手が届かないものである。娘の結婚式のために、何年もかけて刺繍を刺すのが伝統となっている。ところが、最近の民族衣装はプリントものをベトナムから購入しているのが大半になっており、同時に民族衣装の腐敗が進行している現状であるという。お土産用品は、現金収入を得るために生計を立てる役割も果たしている。



ホイプム村を訪れた初日(9月2日13時)にイノシシを狩ったという情報が入ってきた。狩猟は4、5月が盛んで、他の時期も畑仕事に余裕があるときは行うそうである。リスやイノシシを始めとする山の動物を主に狩る。道具は、銃や矢で狙撃して撃ち殺すのが一般的だ。私たちが訪問した時期は、畑仕事が盛んで、トウモロコシ、コメ、ショウガを栽培していたが、私のホストファミリーたちは、ホームステイしている間、家庭の仕事に勤しんでいたもので、農業に関する実態はよくわからなかった。しかしその間、母が刺繍の仕事、父が子守りなどの育児といったように、モン族の生活も変化している傾向があるのは感じる事が出来た。

今回のホームステイで交流会を開催し、相互に自文化の紹介をする機会があった。民族衣装に身を包み、数々の文化を披露して下さった中に、日本に存在する玩具に似ているものが多くあり、また遊び方まで同じだったのには驚いた。右の写真は日本のコマと同様のものだ。



実際に、日本人参加者が試してみるように勧められ、2、3回できれいに回すことが出来ていた。私がこの交流会の中で、一番印象に残ったことは「ケーン」という竹製の楽器による伝統音楽のパフォーマンスだ。音階は一定のものしか出ず、音の強弱で演出していた。この楽器は、体全体の筋肉を使って表現するため、見る人を魅了するパフォーマンスとなり、圧倒された。初めて見る形、音、パフォーマンスであった。9月5日にシャンティ学生寮で行った交流会でも、ケーンでのパフォーマンスがあったが、これらは高校生ということで、



元気に満ち溢れるものだった。同じ楽器でも、演奏者が異なるだけで、全く異なる演出になるのが趣深かった。

次に国際協力という面から報告する。今回、シャンティ山口の一員として現地を訪れることで、実際に支援現場の環境を見つめることが可能になった。ホイプム村の手厚い歓迎、シャンティ学生寮での楽しい時間を費やすことができたのは、NGO 団体の活動が現地で認知されて、現地の人との間に信頼関係が存在しているからであることがわかった。信頼あってこそ、為せている国際支援事業だと感じる事ができた。

シャンティ山口では保健に力を入れており、特にトイレの改善による衛生的な生活向上を目指している。村人と共同して完成したエコトイレの仕組みを説明していただきながら見学をした。「糞尿を廃棄物



として処理するのではなく、有限燃料の1つとして認識する」という概念を持つことによって、使用後の流水の節約だけに留まらず、排尿からの肥料や飲料水の生産、糞尿を発酵させることで得るメタンガスを用いた炊事、これらが可能になっていた。訪問する以前から事業の説明は受けていたのだが、実際の設備やシャンティ山口の事業を目の当たりにして、実際の規模に圧倒されてしまった。現在、このエコトイレは10号まで完成しており、今後も継続事業となっている。

今回のテーマでもあった「援助する側、される側」の各々の意識の持ちようが重要だということが分かった。ホイプム村を訪問するまでには、途上国を支援することは必然的に相手にとって有益なものだと思っていた箇所がある。事前学習でシャンティ山口の方のお話を聞き、自分の中でモン族のイメージを勝手に想像していたからだ。だが、ただ支援するのでは、相手が欲する本当の要望に応じることが困難になってしまい、また支援される側においても、支援する側の思いを確実に受け止めなければ、自立していくための機会を逃し、やってもらって当然という態度に至る。支援する側にもされる側にも必要なのは、慎重な調査を実施することであり、本当に必要な事業や資源なのかを常に問いかけ、話し合う必要があると分かった。相互理解を求め、信頼を培い、援助する側・される側の共同作業のもとで事業を実施することで、本当の意味の「協働」が行えるのではないだろうか。

このような考えができたのは、シャンティ山口の活動一つひとつが献身的であり、現地の人との信頼関係が目に見えたからだ。それを証明したのが、私たちを歓迎してくれたホストファミリーであり、シャンティ学生寮に住む学生たちの存在だ。親身に世話をしていたいただいた裏には、シャンティ山口に対する信頼、敬意、そして感謝の念が込められていたのだと私は思う。

## ●NPO 法人シャンティ山口

今回私達はNPO 法人シャンティ山口のメンバーとしこのツアーに参加した。

## 刺繍と女性達の

スタディーツアーに参加する前に事前学習があったが、そこで学んだことと実際に行ってみてからでは、私の中でタイについて、また少数民族についてのイメージが大きく変わった。

まずモン族についてだが、環境や生活がそんなに豊かとは言えない状況の下で暮らしていると聞いて、心の面でも豊かとはいえないのではないかという勝手なイメージをもっていった。しかし実際は、精神的な面でとても豊かな生活をしていると感じた。家族同士のつながりや、村内部のつながりが深く、みんな笑顔にあふれていて心が満たされるような気もちがした。また、自給という生活スタイルも本当の豊かさを示していると感じた。

シャンティ学生寮では、たくさんの生徒が中国語や日本語やタイの民族それぞれの言語を勉強しているということを学生達からきいて、世界にはこのような状況下（シャンティ寮の学生は貧しい家庭から選ばれてきている）でも必死に勉強をしている人達がいるのだということを知った。私もこの子達を見習わなければという意識が生まれた。彼らの素敵な笑顔や、ありのままの文化・生活を見ることができ、色々な異文化体験を通して、学ばなくてはならないことが増えたと感じた。

私達は、NPO 法人シャンティ山口の会員としてタイに行った。このシャンティ山口はタイの山岳少数民族、特にモン族の支援を中心に活動している。私達は現地でタイでのプロジェクトの一つであるエコトイレを見学することが出来た。このエコトイレは現在では10つも作られている。一緒に同行したシャンティ山口事務局長理事の佐伯昭夫さんによると、排便の垂れ流しがひどく、衛生的にもとても悪い状況をどうにか改善したく、村人と協力して作ったそうだ。私は2か所のトイレを見学したがどちらも造りは同じであった。エコトイレは5つのパーツから成っていて、1つは排便を発酵させてメタンを集めるとガスがたまり浮いてくる。そのガスがパイプを通り隣接する幼稚園の料理を作るのに使用されるガスに利用される。残りの4つは、深さが2.5Mほどで、微生物が尿尿をガスと水に分解する装置である。これらの仕組みでトイレの水が飲めるようになるときいて、驚いたし、に資源を大切にす、また水の大切さを再確認

が飲める  
このよう  
できた。



## ガスがたまる装置

## 水とガスを分解する装置の1つ

シャンティ山口は、パヤオにあるシャンティ学生寮の運営をしている。私達は、その学生寮に行くことができた。毎年約50名が入寮しているそうだが、どの生徒もとても勉強熱心でたくさんの学生が良い成績を修めていると聞いた。生徒達はみなとても明るく、たくさんのお話をしてくれた。彼らによると、今学習しているのは、日本語・英語・中国語・タイのそれぞれの民族の言語だそうだ。中学生や高校生がとてもたくさんのお話を話せているのを見て自分も頑張らなければという気がした。

### ●刺繍について

私のテーマは、「刺繍」に関する聞き取りであった。このテーマを追うなかで、タイの文化や生活が見えてきた。村では刺繍をするのは女性たちだったが、それはとても素晴らしいものだった。一つ一つ丁寧に子供のための服や、民族衣装の一部を作っていて、本当に手間のかかるものだとなり、家族間や民族への愛情のようなものを感じた。今の衣裳はプリントがほとんどだというが、私のホームステイ先のお母さんは、娘のためにたくさんのお小物や衣裳を作ったと聞いた。お母さんの娘さんは、仕事のためにとても険しい山を約40分かけて毎日上り下りしてトウモロコシをついていた。私と年が近いのに子どももいて、これが日本との違いなのかと思った。また私の家に集まっていたお母さん達はみんな仲が良く、お互いのベランダみたいなところでいつも井戸端会議をしていた。私は言葉が全く分からなかったが、とても楽しそうであった。このような情報交換が毎日あるからこそ、村の女性たちはこんなに生き生きしているのではないかと思った。

私達は、タイ北部のモン族が暮らす、ホイム村に3泊4日でホームステイをした。村に入る前は道なき道を大型車で進んで行くのでとても不安だった。佐伯さんの話では、若い人はタイ語を学校で習っているため理解できるが、おばあさん達はモン語しかわからないため会話は難しいといわれた。本当に名前を伝えたりするのも困難だったため、ジェスチャーや声真似をしたりして生活をした。料理はご飯とスープの形式でするのがほとんどだった。トイレとシャワーは家とは別の場所にあった。また料理する場所もトイレほどは離れていないが離れたところにあった。



今回の研究のテーマであったタイの女性の刺繍について、ホイム村でのホームステイ中に、私は実際に刺繍をしたり、刺繍がたくさん施された民族衣装を着させていただいたり、見学することができた。この刺繍文化は、親から子へ代々伝わって



いるようで、時間があれば家のベランダのようなところでやっているお母さん達をたくさん見た。ホイプム村では、小学生に満たない小さい女の子達はまだ刺繍はやっていなかった。最近はお土産品は手作りだが、民族衣装はプリントのものがほとんどで、ベトナムから買っているのがほとんどだそうだ。刺繍糸や生地は、専門の売り子さんが売りに来るそうだ。私はお母さんに連れられてお母さん達の井戸端会議にも参加したが、そこでも話しながら刺繍するお母さんがいた。交流会では、たくさん民族衣装をみる事ができた。私が着た民族衣装は、上から羽織るものと、前掛けと、スカートの3つのパートに分かれている。スカートや羽織るものには、ビーズのようなひらひらしたものが飾ってあり、伝統的な踊りをするとき揺れてとてもきれいだった。ホイプム村以外で、訪れたセーンサイ村では、刺繍の文化を紹介する施設に行くことが出来た。そこでは、昔の刺繍や現在は少ない手作りした民族衣装を着た写真のような女性グループの写真などがかざっており、刺繍の歴史の長さに感動した。また、畑仕事をしない時期にするので時間がかかりかかると感じる。

#### ●「援助する側、される側」について

私が今言えることは、「本当の援助とは何なのか」ということについて感じたことだけである。シャンティ山口の活動のように、私達援助する側が援助される側にすべてのことをやってあげるのではなく、自立を目指さなければならないと思う。ただ単にトイレの装置を作ってあげるだけではなく、村の人と協力して一緒につくる。壊れてしまった時の直し方を教えたり、作り終えてしまっても見守ることができるようにする。幼稚園を作るだけでなく、保育内容の充実を支援したりする。このような、シャンティ山口が行っているような活動が広まるのが大切だと感じる。

このような援助をやっていくためには、頻繁に援助する側に出向き、その地域の方々とコミュニケーションをきちんと取る参加型の援助が必要だということがわかった。事前学習会や現地に行ってわかったのは、参加型支援モデルが示す効果である。

私はこのスタディーツアーを通して「刺繍」という文化を学び、NPOは現地で一体どういう活動をしているのかを実際見る事ができた。私は今回支援する側としてタイに行ったが、支援するということは相手のことを思ってからこそ成り立つと感じた。つまり、支援する国や地域の「自立」を促すことが大切だと思う。また支援するにあたり物資や活動が本当に必要なのかを見極めなければならないし、むやみに現地に踏み込もうとせず、下調べをしっかりとすべきと思った。これらを実現するためには、現地へ行って「参加する」という行為が伴わなければならない。また支援を受ける側も、支援する人と協力するという気持ちをもたなくては、支援を続けていてもなんの成果出せないのではということはこのスタディーツアーで学んだ。



## 7. 国際武運化学科 2年

平岡美佳子

今回シャンティ山口に会員としてこのスタディーツアーに参加した。主な動機は大学に入る前から国際協力に興味があり、実際現場を訪れて援助する側、される側両方の観点をやしない、そこから自分なりに国際協力について考えてみたいと思い参加した。

このツアーではシャンティ山口の行っているエコトイレ事業、また 6 年前に終了した保育園支援事業を見ることができた。特に私が興味を持っていた保育園事業については、センサーイ村の保育園を訪れ、そこで働いている保育士さんや村の村長さんに話を聞くことができた。近年タイでは保育士になるためには資格を持っていることが必須条件となっている。そこで現在は猶予期間ということで、資格を取るために土日に大学へ行っているそうだ。また、このセンサーイ村の保育園はタイの保育園の模範となっている。センサーイ村の村長さんは「保育園ができたことによって親は働きやすくなった。」と語っていた。現在ではこの保育園についてはタイ政府に委託している。



そして、ツアーの最終日にシャンティ山口の運営しているシャンティ学生寮にお邪魔した。モン族、リス族、アカ族などの子どもたちがこの寮に下宿し中学校、高校に通っている。どの子どもも笑顔で私たちを受け入れてくれた。タイ語だけでなく、中国語、英語が話せるので、夜中まで将来の夢や日本のこと寮での暮らしのことをたくさん話してくれた。みんな国際協力や教師など明確な夢を持ちその夢へ向かい仲間と一緒に努力していることが感じとれた。

3泊4日という日程で、ホイプム村にホームステイをした。このホイプム村はシャンティ山口がアグリフォレストリーや農作物の転換、エコトイレの普及等の援助を目指している村である。ホームステイ先はほかの家とは違いコンクリートで作られていた。また、テレビもあり、ご飯を食べたあとにはタイのドラマを見せてくれた。この電気はソーラーパネルで発電している。ホームステイ 1 日目が発熱した私にお母さんはおかゆを作ってくれた。この後、体調を崩したため最終日までホストファミリーと一緒に過ごすことはできなかったが、最終日に民族衣装を着せてくれたり、夜は指差しの本を使って会話を楽しむことができた。私のホストファミリーは若い夫婦で、お母さんは村の保育園で働いていた。この村は行政の村として認められていないため、保育士の資格は必要ない。他の家庭では、男性たちと一緒に農作業をしにいく女性が多くみられた。

村では生活のいたる部分で工夫がされていた。農作物の中心となっているトウモロコシ。その芯は薪がわりに使用していた。調理はすべて釜を用いて行われており、薪や炭の代わりに燃料として使われていた。2日目の交流会でふるまわれた餅は、バナナの葉につつまれていた。このバナナの葉には抗菌作用があり、3日はもつということでお土産までもらった。この村の人たちにとって一番の楽しみはお正月だそうだ。餅つきやケーンという楽器を演奏し、民族衣装に身を包みごちそうを家族みんなで食べる。昔の日本のお正月に似ているなど感じた。

このスタディーツアーに参加して国際協力や援助する側、される側について前とは違った考えをするようになった。シャンティ山口の事業を見たり、日本のスタッフと現地のスタッフのやりとりを見ていてしっかりと信頼関係が作られていると感じた。だからこそ、一方的な支援ではなく、現地の共同体の習慣や伝統を変えることなく、地域に根付いた支援がされていた。ただ単に日本の技術を持ち込むのではなく、支援する地域にあった支援をすることの大切さを身をもって感じた。特に、「豊かさ」や「貧しさ」の考え方が変わった。ホイプム村にホームステイしたり、現地の人と話したりすることで、この2つを自分の指標だけで決めつけてはいけなかったことが分かった。このことにより、人それぞれの豊かさがあるのだから自分の生活での豊かさに近づける支援ではなく、現地の今ある生活を基にして問題を現地の人と一緒に解決したり、新たな技術を伝えることが本当の支援なのかなど、支援のありかたに対する考えが一番の変化だと思う。また、自分が大学で勉強できていることに感謝の気持ちを持つことができるようになった。

最後に、「援助する側、される側」については、援助する側は自分の価値観だけで援助の方法や援助自体を決めてはいけない。シャンティ山口のお話や村の人と現地スタッフのやりとりをみて、現地の共同体や伝統を変えることなく支援しておられることがわかった。事前学習のときは、できるだけたくさんの支援をすることやよい支援をすることが大切だと思っていたが、実際の支援の現場をみると、支援するのと同じくらいに、そこまで至る過程が大切なのだと気づいた。現地の人たちの信頼があつてこそ、支援が受け入れられるのだということに気づいた。



今年3月につづく2回目のホイプム村の訪問だった。前回見えないことがよく見えた。

- (1) トウモロコシ畑の様子。遺伝子組み換え農業の実際。トウモロコシ以外にない山の斜面。想像以上に進行している。
- (2) 日本の農山村との類似と相違をみる切り口が見つかった。着いてすぐイノシシ捕獲のあと親戚・近所で食べあう習慣。交流会での餅つき。
- (3) スタッフのジュポンさんの話をまとめて聞くことができた。その中で「モンは、山が好き」「山に住むことを一番いいと思っている」ということばを聞いた。モン族の文化や生活習慣に対する誇りを強く感じた。



中村尚司著『豊かなアジア、貧しい日本』という本を持参して読みながらツアーを続けた。経済的には貧しいアジアが、経済的には豊かとされる日本（先進国）に対して、人間らしい生活、持続可能な社会を作っていく上で、アジアから学んでゆくべきだという視点で書かれた本だ。実際にはどうなんだろうか。経済的な貧しさの固定（格差）にならないか、自然の中で自然に寄り添って暮らしている人々の暮らしの知恵に未来社会の根源的なあり方がはらまれているのか、そうだとするとそれをどのように生かしてゆくのか。遺伝子組み換え農業との対峙とトイレ・衛生事業に問題を絞ってさらに考えていきたい。

今後のツアーのために次の点が重要だと考える。

- ・ホイプム村（モンの村）を知ること、その日常生活と歴史などを学ぶことは、ホームステイや交流会が大きな役割を果たすし、とても大切なことだと思う。
- ・その上で参加者に、ホイプム村の抱えている問題とシャンティ山口との共同の事業で解決しようとしている問題の共有を事前準備で図る必要を感じた。
- ・慶応大学の学生3名は、1ヶ月の時間を調査にあてていた。長いだけがいいとは思わないが、半年、一年と腰をすえてかかることも必要だと思う。タイ北部国境からラオスにかけてモン族の歴史と今の生活、焼畑の荒廃・遺伝子組み換え農業からの脱却の課題は、その深さをもっている。

遺伝子組み換えのトウモロコシの畑の現実、想像以上だった。前に見たときは、村の山の頂上に近いところを焼いていた。到着したときにも火の手が山を覆っていて、驚いたが、今度は、村に通じる道路脇、住宅からすぐ側の山まで焼かれていて、斜面一面にすでにトウモロコシが植えられており、成長の度合いは畑によりちがっていたが、背を伸ばしていた。村の畑にはトウモロコシしかないのか、と言ってもおかしくない風景になっていた。

村の人は勤勉である。斜面に道を作り、バイクや徒歩で籠に作業道具を積んで離れた畑に通う。案内してもらった3～4キロ離れた別の谷間でもぎっしりとトウモロコシを植えていた。ところどころにタンクがありホースが延びている。モンサント社指定の購入

させられた農薬が溶かされて溶液として入れられている。播種の前、成長期の一時期に撒くように指示され、その通りに行っているという。以前、この地域で盛んであった果樹・ライチの一種の果樹園が部分的に焼かれずに残っているところがある。ぽつんと島状にトウモロコシ畑の中に残っている。そこには農薬が撒かれない。そのため樹の下は、茅、イラクサなど普通に生えている草が緑をつくっている。トウモロコシの畑には、トウモロコシ以外には見えない。近づいてみるとわずかにミントが弱々しく芽を出しているのみだ。

土地利用のあり方としてとても危惧を感じる。大雨・洪水で土砂崩れを招くことを恐れる。村との共同事業、アグリフォレストリー事業は、本当に求められている事業である。

## 9. 山口大学工学部1年

久保 貴大

今回のツアーで私は初めて海外に飛び出しました。ツアーに参加することで自分の中で何か実感をもって変化すると思っておりましたが、実際はあいまいなものでした。ホームステイと学生寮の滞在で言葉の大切さを感じたのと同時に、言葉が無くても意思を交わせることを学びました。またモン族や学生達との交流会では彼らの個性の強さを感じました。一人何か一つは特技を持っており、とても驚きました。ツアーを通して外国語への関心と、技術を身につけ個性を大切にす気持ちが一層深まりました。

モン族と日本人との経済的格差はとても大きく、さぞ生活に苦勞をしているのだろうと考えていました。しかし、彼らに不便さを感じている様子は無く、見る限りではとても幸せそうでした。むしろ不便な分、彼らは様々な知恵や技術を持っており、とてもたくましさを感じました。学生寮の生徒達に関してもとても明るく、日本の学生よりいきいきしていました。

事前学習の内容で『経済的に厳しい村にどのように支援をするか』と言う問いに対して、『何もしないという』選択肢があったことがとても印象に残っていました。いくら私達が同情しても、彼らにはその理由がわからないそうです。生きるために必要な環境と、自立して稼ぐことのできる環境を整える加減がとても難しいと思いました。例え貧しくかったり不便だったりしても、彼らはとても幸せそうでした。支援を行うにおいて現地の住民にとって幸せとは何かを理解することが重要であると感じました。

発行日：平成22年10月10日

発行：山口県立大学国際文化学部「地域実習」